

## 巻頭言

中部部会理事長  
安村 仁志

主の聖名を賛美します。中部部会の働きの一つである「会報」が続けて発行できますことを主に感謝いたします。

昨年度の福音主義神学会誌(41号)は、創立40周年記念号でした。40年の歩みを振り返り今後の展望を探ることを目的に編集され、創立期から多くの動きを進めてこられた先生方が寄稿されました。私にも執筆の機会が与えられ、「中部部会の歩みと展望」と題する小さな原稿を通して中部部会発足の経緯、発足以来の歩み、そして私なりに思う課題について書かせていただきました。歩んできた道のりを振り返ることを通して、そこに常に神さまの大いなる導きがあったことを改めて確認することは、これからも歩を進めていく上で大きな力となることを覚えさせていただきました。少々忙しい日々を過ごしていた中の執筆でしたが、幸いな時を持つことができ、恵みをいただきました。

勤務いたします大学の市民向け「オープン・カレッジ」で、この春は「今、生きることを考える」というテーマで講座(14回)をもっています。このような、重そうなテーマで人は集まるだろうかとも思っていましたが、予定の定員を超える方々が受講してくださっています。扈間の講座ですから、受講者はいわゆる中高年の方々が中心ですが、毎週熱心に集っていてくださいます。人生が長くなったことに加え、さまざまな意味で私たちの生活・社会はこれまでいいのだろうかとのある種の“不安”の中で、“考える”時と一緒に持とうと願っておられるのだろうかと推察しながら、お話をさせていただいている。

どんなことをお話しているかを少しご紹介してみます。第1回は《人とは何ものだろうか》ということについて、まず人間の特質を表わすラテン語(ホモ・サピエンス、ホモ・ロクエンス=ことばを話すヒトなど27)によって考え、その中からHomo inermis(武装していない、丸腰のヒト)、Homo socialis(社会的営みをするヒト)、Homo religious(宗教心をもつヒト)をもとに、人間の物理的・肉体的・精神的弱さについて考えました。そしてパスカルが『パンセ』の中に残した“L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature; mais c'est un roseau pensant.”(人間は、一本の葦にすぎない。自然のなかでもっとも脆いものである。しかし、それは考える葦である)から、自律的に自分・生き方にについて考える存在でありたいと導かれました。3回目は、《現代とはどんな時代か》を“ポスト・モダン”的な面から考え、そのポスト・モダニズムゆえの人間関係の希薄さ(個人主義的になる、バラバラになる、秩序がなくなる)、共同体の再構築を話題にしました。4回目

は、《人は一人では生きられない／人と一緒にいると悩みも生じる》ということをもとに、人としての“個(孤)と集団”について考えました。そして、哲学者森有正の『生きることと考へること』、『思索と経験をめぐって』を紹介しました。そこでは、森有正の真骨頂《経験》について、「人間はだれも“経験”をはなれては存在しない。人間はすべて、“経験を持っている”わけですが、ある人にとって、その経験の中にある一部分が、特に貴重なものとして固定し、その後の、その人のすべての行動を支配するようになってくる。すなわち経験の中にあるものが過去的なものになったままで、現在に働きかけてくる。そのようなとき、私は体験というのです」「もともと、経験は人間にとて根源的であり、それを外部から矯正することはできない貴重なものである。経験は、在る一つの現実に直面した時、それによって私どもがある変容・変化・作用を受け、それに反応してある新しい行為に転する、そういういちばん深い私たちの現実との触れ合いのことをさす。しかし、‘その人固有の経験’の一部が貴重なものとして固定化し、その後のその人のすべての行動を支配し、人生を質的に変えていく力に働くものを‘体験’と呼ぶ」を引用しました。森における《経験》は《個》につながるような意味にもとれ、「個」たる人間は異なる「個」人や人たちの場に出ていって交わり(コミュニケーション)を得る、そしてまた「個」たる自分に戻ることの大切さを示していることをお話ししました。皆さん、よく分かると頷いておられました。

私たちはそれぞれ他の人とは全く違うかたちで、また道のりで、神さまの導きのうちに救い主イエスさまと出会い、新しいいのちに与るという固有の経験をしました。それは誰にも否定されるものではない、貴い、生の足場です。そして、救いの恵みによって日々生かされています。さらに福音宣教の業に与らせていただいている。個々の教会において、また神学の営みにおいてもその中に置かれていると言えましょう。

その場合、それぞれ具体的なところにおいて、具体的な「わざ」がなされるわけですが、そこにおいても折々固有の“経験”をしています。恵みの経験、失敗の経験など、いろいろだと思います。それらは何らかのかたちで先の歩みに影響を与えてきます。と、言ながら、よく振り返ってみると、実際のところ本当に“経験”が生かされているか疑わしく感じられもするのです。私たちは一ワープロの登場とともに実感するのですが——前に作成した“文章”を上書きするように、少し変えながら、本来新しいはずの“文章”を書いてしまいます。それは文章上の問題だけではありません。前に行なったこと、前にとった方法にも当てはまります。“文章”と表現したことの中には、いわゆる文章だけではない、文章に表れる発想であったり、具体的行動であったりするわけです。しかも、前にそこそこ“旨く”いったような場合は、ますますその“上書き度”は上がってしまいます。そうなると、森がいうところにあてはめると、経験が過去化し、新たな発想・行動を支配し、固定化させてしまうものになってしまいます。

わたしたちの信仰そのものも、私たちの日々の生活も、伝道のはたらきも、さまざまな営みも、神さまの導きのうちに日々新たにされることを期待し、それに単純に従っていきたいものです。

神学会中部部会を振り返ると、28年間守られてきたその働きは表面的には、変化のないものです。同じかたちで営みを続けています。前年度の行事を“上書き”するようにして続けています。その意味では忸怩たる思いもするのですが、森有正の語る以下のエピソードにも思いを馳せたいと思います。身近にあった桜の木について、日常的にはほとんど変化がない、成長も感じられない、しかし何十年もたってふと見ると見事に成長している、そこに感動があるといったのですが、動かないようでいて、しかも確実に成長している、固有の特質にしっかりと根ざし、日々水・養分を受けつつ、日々新たに育っていく(変わっていく)こと、それに大きな意味があるということです。福音の本質は不变であり、その確固たる土台に根ざしつつ、日々その日・その年固有の導きのうちを歩ませていただきたく存じます。

原稿を寄せてくださった先生方、編集・印刷等にあたって下さった先生方に感謝申し上げます。この会報がこれからもさらに豊かなものとして用いられていきますよう、お祈りしつつ。

